

第十話

純友聚徒党事賊徒勢休事

『前太平記』上 卷第二 三十四頁から三十七頁より

[西海の海賊、純友の配下に入る]

まもなく、純友は伊予国に下り、昼夜朝夕、陰謀の企ての他、余念なく、気を揉

昼夜旦暮 陰謀の企ての外 他事なく

むといっても、西海南海全て皇室の徳の波が穏やかで、一人として皇室を軽んじる

心を碎くといへども、

者がなかったので、誰にこうと言い出せる者もなく、その身の分際をもって、(朝

其身の分限を以て、

廷を相手取って)打って出たところとて、人数の少ない軍勢であるので、中途半端

懣なる

な戦をして、隣国の武士たちに打ち破られるような事も、思慮がないことの至りで

軍して 隣国の武士共に打ち破られんも、 思慮なきの至りなり、

あり、どうしようかと考えあぐね、途方もなく月日を過ごしたが、急に思い出した

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

空しく光陰を送りけるが、

ことがあって、すぐさま宿紙(巻)を(筆で) 染め出して、令旨の文章を書いて箱に入

俄かに宿紙を染め出だして、

令旨の文章を書いて箱に納め、

れ、この時、船中で生け捕っていた海賊がまだ獄中に閉じ込めたままにしておいたので、甲板にお呼びし座らせ、顔を優しげにし言葉を丁寧にして言ったことは、

「近年、国々に盗賊が多く、民草はこれに悩まされている。全てお前たちの仲間であろうが、暴虐の限りこれより酷いものはない。それゆえに、(民を苦しめる者たちを)捕虜にしたのを幸運として、すぐに斬罪にすべきであるけれども、俺には少しの思惑があってお前たちの命を助けておいた。事情はやむをえない。東国に平将門親王と申す方がいらっしゃる。正統な皇子で天子の位に即位なされるべきご身分であるが、不幸にして帝位に即位なされないことをご不満に思って、今東国にて義兵をお挙げになり、もはやその威光は関八州に行き渡っている。そのため、私はこの君子にお拝命され、当国(伊予国)で旗揚げし、四国中国も切り伏せ、東国西海から同時に都に攻め上がり、将門親王を天子としてまつりあげ、俺は関白となって天下を治めようとするために今ここにいる。お前たちがもし後日の栄華を思うなら

汝等若し後日の栄耀を思はゞ、

ば、この君子に拝命され、私の陣営に下り、お前たちの仲間を招き、軍功をおさめ

此君に頼まれ進らせ、

我が幕下に属し、

汝等が徒党を招き、

軍忠を致せ。

よ。そして、二人に一国々ずつの領地を授け、さらに軍功があったとしたら、大きな荘園の二つだろうと、三つだろうと、近いうちに手配し与えよう。これこそが親王から下された軍勢催促の令旨というものである」と、言って例の箱から取り出して、仰々しく仰ぎ尊いでこれを読む。その言葉に言うことには、

押し戴いて之を読む。

下す、山陽・南海・西海三海道諸国軍兵等の所

早く天下の仇を誅伐し、天下を穏やかにする政を行うべき事

右にあること、武蔵権守正六位上藤原興世朝臣、将門親王の勅命を承って言うことには、私は桓武天皇の正統となって、皇室の位に上ることを期待していると言っても、それでもやはり天子の運が遅れてしまって、まだ即位に至ってない。くすんだ煙が心に香り、怒りの炎が肝を焼く。なので、今やがて一挙に義兵を起こそうとする。早く、諸国の内に武勇の力量を持っている連中を、同じく幕下に加えさせよ。もし同志でなければ、すぐに罰を与えるがいい。もし軍勢を率いる特別な力に抜きんでいる者がいるならば、御即位の後、きっと望みに従って、破格の褒美を与えらるでしょう。諸国は承知するがよい。よってこれを仰って行う。

承平二年四月九日

武蔵権守正六位上藤原朝臣が申し上げる

〈原文〉

下 山陽・南海・西海三道諸国軍兵等所

応早誅罰天下之讎敵、致四海静謐事

右、武蔵権守正六位上藤原朝臣興世、奉将門親王勅称、我為桓武正統、雖期宝祚、猶依聖運遅々、未至即位。鬱煙薰心、噴火焼肝。故今将起一挙之義兵。早、三道諸国之内、堪武勇之輩、同令与力。若於不同心者、速可致伐責。若有拔、殊功者、御即位之後、必随乞宜加不次之賞也。諸国宜承知。依宜行之。

承平二年四月九日

武蔵権守正六位上藤原朝臣奉

〈書き下し〉

下す 山陽・南海・西海三道諸国軍兵等所

早く天下の讎敵を誅罰し、四海の静謐を致す事

右、武蔵の権守正六位上藤原朝臣興世、将門親王の勅を奉つて称く、我桓武の正統と為して、宝祚を期すと雖も、猶聖運遅々に依つて、未だ即位に至らず。鬱煙心に薰じ、噴火肝を焼く。故に今まさに一挙の義兵を起こさんとす。早く、三道諸国の内、武勇に堪えたるの輩、同じく与力せしめよ。若し同心せざるに於ては、速やかに伐責を致す。若し殊功を抜きんづる者有らば、御即位の後、必ず乞うに随つてよろしく不次の賞を加ふべし。諸国よろしく承知すべし。依つて之を宣べ行なふ。

承平二年四月九日

武蔵の権の守正六位上藤原の朝臣奉る

と読み上げた。欲深く、乱暴な海賊たちが、何故これを喜ばないだろうか。背をぐっと伸ばして申し上げたことは、「これは素晴らしいご計画。二人(我々)の命をお

居丈高に成つて申しけるは、

助けになるだけでなく、領地の主となるようなこと、このような嬉しいことこそございませぬ。我々は去る延喜年間に、伊勢国鈴鹿山で官軍に討たれた山賊の首領で、伊賀寿丸と申し上げる者の孫でございます。祖父が討たれてのち、播磨に住んで、山陽・山陰、両道の者たちは、皆、我ら兄弟の下位にある者たちでございます

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

す。かの者たちを招くならば、総じて五・六千人はいましよう。皆は船中で年月を過ごし、船を自在に使うことの出来ている者たちでありますので、国々、浦々の案

舟に自在を得たる者共にて候へば、

国々浦々の案内、

内なら、残る所なく知り申し上げています。まず、伊予国熊山には、沢太郎・今張

残る所なく存知仕つて候。

六郎。讃岐国には、新宮の滝夜叉、高松の鬼九郎、同国に弟の熊尾の新六。阿波には池田、中村の一族。土佐に別府一族。淡路に由良一族。紀伊国には田辺の一族が三十七人。播磨国の法華山の袈裟太郎。備前に射越、原、今木一族。備中には松山の荒五郎。備後国には、尾道六郎。安芸国には金剛十郎。篷屋の四郎。関屋の梶五郎。長門国に萩野勘六、同国に金地丸、梅根父子、杉兄弟。九州には上松浦、下松浦、高木、熊代らを筆頭として、三道の頭が百六十人。その他の一類与党、数えるのに余裕などない（ほど多い）。この者どもをお呼びになったならば、西海は残らず、その御手の内に入りますこと、思いのままでございます。まず、我々はお暇を

案の内に候。

いただき、国々に広く知らせあつて、加勢の軍勢を急ぎ集め日にちを過ぎさず、急いで参上しまししょう」とわけもなく了承して、「早くも出発ししょう」と申し上げたところ純友はたいそう喜び、「まずは旅立ちを祝おう」と言つて、酒肴を用意して

三献を受けてかの者たちと酌み交わし、黄金十両に太刀二振を備えあって引き出物に出した。それからして二人の者は国々をまわり挙兵の催促をしたところ過半数は

過半

これについて行くといっても、ある者は後日の難儀を思い、ある者は渡海の風に捨

之に随ふと雖も、

或ひは後日の難を思ひ、

或ひは渡海の風に黙止され、

て置かれ、てきはきとは集まらなかったのので、無駄に一、二年を過ごしたのだった

はかばかしく馳せ集まらざりければ、

徒に一両年をぞ過ぐしける。

た。ところが、今年将門の蜂起の次第が噂されたところ、三道の海賊たちはこのまま遅刻での参上はみっともないに違いないと思って、我も我もと急ぎ集まった頃にその軍勢は一万人に及んだのだった。純友はこれに勝算を得て、その身は自分の城郭にいたままで島々に仲間を出し、まず兵糧用意のためにとあって、海上往来の官物私財の区別なくたいそうな乱暴に及んだのだった。

注釈

※壺・宿紙……薄墨のすきがえしの紙。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/5/27

改訂：2021/3

海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※